

『群疑論』と『維摩經』

金子寛哉

一、はじめに

筆者はかつて、中国唐代の浄土教祖師の一人である懐感の『釈浄土群疑論』に於ける引用経論について述べたことがある。⁽¹⁾

その中で最も回数が多かったのは『観無量寿經』であり、それについて多かつたのが『維摩經』であった。しかし『維摩經』の引用については他の稿を執筆したときに、部分的に触れていたこともあり、その他の事情も重なり、『維摩經』全体にわたる検討はついに触れる機会もなくそのままになっていた。⁽²⁾

『群疑論』中の引用経論文の確認作業をしたそもそもの動機は、『群疑論』で取り上げている問答の思想的背景を考える為であった。其の意味では、論文中に引用される『維摩經』の経文其のものの厳密な検討は勿論であるが、其れと同時に懐感の活躍した頃の『維摩經』自体の流布状況はどのようになって居たのかという事を考えなくてはならない。

従つて本稿では以上の二点に留意しながら『群疑論』に引用される『維摩經』の文のもつ意味について考えてみたいと思ふ。

二、中国に於ける『維摩經』の流布

『維摩經』の中国への訳出伝来は凡そ次のようになる。

- (1) 『古維摩詰經』一卷嚴仏調(後漢靈帝、中平五年、188)
- (2) 『維摩詰經』二卷支謙(呉孫權、233~252) 月支国人
- (3) 『異維摩詰經』(異毘摩羅詰經) 三卷、或二卷竺叔蘭(晋惠帝元康元年、291、一説玄康六年、296)
- (4) 『維摩詰所說法門經』一卷、(維摩詰經、維摩詰說不思議法門經、三卷) 竺法護(晋惠帝大安二年、303) 敦煌人
- (5) 『維摩詰經』四卷、祇多密(東晋)
- (6) 『維摩詰所說經』三卷、鳩摩羅什(姚秦、弘始八年、386) 龜慈国人
- (7) 『説無垢称經』六卷、玄奘(唐高宗永徽元年、650、一説貞觀

『群疑論』と『維摩經』(金子)

年中)

- (8) 『聖無垢称の説と名づける大乘經』チョン、チュル、クリン(八世紀頃)
- (9) 『刪摩詰經』一卷、竺法護(自らの訳本の偈文の刪略本?)
- (10) 『合注維摩詰經』五卷、支敏度(晋惠帝代、支謙訳を底本に法護、叔蘭訳を合衆)。

等の諸本があつたことが既に指摘されている。しかし、これらの中(9)(10)は独自の訳本ではなく、(8)もチベツト訳で『群疑論』との関わりを考える上では其れほど直接的ではない。しかも(1)から(7)までの訳本中、現存するのは(2)(6)(7)の二本のみであつて、その他の訳本は既に散佚していてみることは出来ない。

後にも触れるように『群疑論』に引用するのは、これらの諸訳の中訳文などから考えて(6)の羅什訳が中心となつてゐることは言うまでもない。何れにしても此の経が、はやくから中国に伝来し、中国の人士に広く読まれ、受け入れられる素地が出来ていたことは以上の諸訳の経緯から見ても充分推測し得ることである。

次にこれらの多くの『維摩經』の訳出經典が、中国でどのように受入れられて行つたのかという点をこれらの經典に対する注釈書等を通してその概要を把握して見たいと思う。此の経に対する注釈書を先学の論稿をもとにまとめて見ると凡

そ次のようになる。

- (1) 『注維摩詰經』八卷或十卷、僧肇(406)
 - (2) 『維摩義記』スライン本(500年頃)
 - (3) 『維摩義記』八卷、慧遠(523～592)
 - (4) 『維摩詰經広疏』十四卷或二十八卷、智顛(538～597)
 - (5) 『維摩詰經三卷玄義』二卷、智顛(538～597)
 - (6) 『維摩經玄義』(浄名玄義、浄名玄疏、六卷、智顛(538～597)
 - (7) 『維摩詰經遊意』(浄名経遊意)一卷、吉蔵(549～623)
 - (8) 『維摩詰所説経疏』(浄名経略疏)五卷、吉蔵(549～623)
 - (9) 『維摩經義疏』(浄名広疏、維摩經広疏)六卷、吉蔵(549～623)
 - (10) 『浄名玄論』八卷、吉蔵(549～623)
 - (11) 『維摩經義記』第四、一卷、スライン本(～539)
 - (12) 『維摩詰經義疏』五卷、聖徳太子(573～621)
 - (13) 『維摩經宗要』一卷、元曉(～617)
 - (14) 『維摩經疏』(説無垢称経疏)六卷或十二卷、窺基(638～682、672～674間の著)
 - (15) 『維摩經略贊』七卷、窺基(638～682)
 - (16) 『維摩經記』二卷或三卷、湛然(711～782)
 - (17) 『維摩經広疏記』六卷或三卷、湛然(711～782)
 - (18) 『浄名經集解関中疏』二卷、道液(～760¹⁴⁾)
- 等が見られる。これらのほかにもまだあるのではないかと思われるが、以上の注釈疏の書名に依つて見ても『群疑論』著作当時の『維摩經』の流布状況がある程度推測されるのでは

ないかと思う。

このような訳経並びに注釈、講経による『維摩經』の流布が、やがて絵画化され、『維摩變』となつて流布して行つた事も既に広く知られている。今日最も良く知られている敦煌石窟における『維摩變』は隋代が上限であつて、それ以前のものは見られないという⁵⁾。

しかし、中国本土の方では早くから此の經が顧愷之に依つて描かれていたという伝承もあり、伝承の信憑性そのものとはともかく、その変相の人物像が南朝(建康府)風の画図である点では異論が無いとされている。また、此の經の絵画化されたものは北方の雲崗石窟第六洞にも見られ、その衣服の様式は北朝人士風のものであるとされ、それでいて南朝系の維摩像とも無関係ではない様相を示しているので、南方のものが北方に伝わつたのではないかと推測している説がある⁶⁾。

何れにしてもこの維摩像が中国の梁代(502～557)には既に変相図化され、広く流布していたことになる。それは前述した注釈、講説の流布年代と重ね合わせて見ると、淨影寺慧遠の『義記』や、天台智顛が『広疏』や『玄疏』などを著作して盛んに弘めていた時期と場所に合致することになる。

此のように絵画化された変相図が其の後中国の統一勢力が敦煌へ及ぶようになった頃から石窟中にも描かれるようになり、盛唐期の維摩變にまで展開されて行くことになつたもの

と考えられる。これはただ変相図独自の展開のみならず、智顛の後に続く、吉藏、元暉、窺基、湛然などの著作、講説の活動とも密接に関わつていたものと考えて其れほど不自然ではないと思われる。

『群疑論』に於ける引用が、此のような氣運のなかで、しかも唐の都長安において行われた問答であるということ念頭において考へて見る必要がある。

三、『群疑論』に於ける『維摩經』の引用

次に『群疑論』の中に引用される『維摩經』の文と經典自体の文を対照してみたいと思ふのであるが、論文と經文を共に掲示する事は本稿においては望めないので他の機会に譲ることとし、今回は論文の章目名と經文の品名のみを掲示し相互の関連について考へてみたいと思ふ。その対照を示すと凡そ次のようになる。

【1】(総標身土章)淨6・5頁下。(答)卷下、見阿閼伽品【正14、554下～555上】

【2】(総標身土章)イ淨6・5頁下。(答)卷中、佛道品第八偈文【正14、550上】

(総標身土章)ロ淨6・5頁下。(答)卷中、文殊師利問疾品【正14、544中～下】

(総標身土章)ハ淨6・5頁下。(答)卷下、香積伽藍品【正

『群疑論』と『維摩經』（金子）

- 14' 552 中】
【3】〈総標身土章〉浄6・5頁下。(答) 卷上、佛國品【正14' 538 下】
【4】〈有漏亦浄章、イ、体穢相浄〉浄6・12頁上。(答釈) 卷上、佛國品【正14' 538 下】
【5】〈有漏亦浄章、ロ、正会維摩〉浄6・12頁上。(問) 卷上、佛國品【正14' 538 下】
【6】〈有漏亦浄章、ロ、正会維摩〉浄6・12頁下。(答釈) 卷上、佛國品【正14' 538 中】
【7】〈安師三句章〉浄6・13頁下。(答釈) 卷上、佛國品【正14' 538 下】
【8】〈体穢現浄章〉浄6・14頁下。(問) 卷上、佛國品【正14' 538 下】
【9】〈有相趣求章〉イ浄6・15頁上。(問) 卷中、問疾品【正14' 544 中〜下】
 〈有相趣求章〉ロ浄6・15頁上。(問) 卷中、觀衆生品【正14' 547 中】
【10】〈有相趣求章〉イ浄6・16頁上。(答釈) 卷上、佛國品【正14' 537 下】
 〈有相趣求章〉ロ浄6・16頁上。(答釈) 卷上、佛國品【正14' 537 下】
 〈有相趣求章〉ハ浄6・16頁上。(答釈) 卷中、文殊師利問疾品【正14' 545 下】
 〈有相趣求章〉ニ浄6・16頁上。(答釈) 卷上、弟子品【正14' 540 中】
【11】〈世諦往生章〉浄6・19頁上。(答釈) 卷上、佛國品【正14' 538 上】
【12】〈世諦往生章〉浄6・19頁上。(答釈) 卷下、見阿閼仏品【正14' 555 上】
【13】〈世諦往生章〉浄6・19頁下。(答釈) 卷下、見阿閼仏品【正14' 555 中】
【14】〈仏来不来章〉浄6・20頁下。(問) 卷下、見阿閼仏品【正14' 555 上】
【15】〈仏来不来章〉浄6・21頁。(答釈) 卷中、問疾品第五【正14' 554 中】
【16】〈仏具諸願章〉浄6・30頁上。(答) 卷下、菩薩行品【正14' 554 上】
【17】〈不動此浄章〉浄6・33頁上。(問、答釈) 卷上、佛國品【正14' 538 下】
【18—1】〈当今仏法章〉浄6・48頁下。(問) 卷下、香積仏品【正14' 553 上】
【18—2】〈当今仏法章〉浄6・49頁上。(答釈) 卷下、香積仏品【正14' 553 中】
【19】〈念仏除魔章〉浄6・53頁上。(答) 卷上、菩薩品【正14' 543 上】
【20】〈念仏除魔章〉浄6・53頁下。(答) 卷中、不思議品【正14' 547 上】
【21】〈唯勸西方章〉浄6・64頁下。(答釈) 見阿閼仏品【正14' 555 上】

下]

【22】〈退位欣淨章〉淨6・66頁。(問、答釈) 卷下、香積仏品【正14・533上】

【23】〈退位欣淨章〉淨6・66頁下。(答釈) 卷下、香積仏品【正14・533上】

【24】〈退位欣淨章〉淨6・67頁上。(答) 大集經の中に引用される維摩經であつて維摩經そのものの引用ではない。「大集經」88―14丁の全文。

【25】〈二乘不生章〉淨6・75頁下。(答) 卷上、弟子品【正14・540上】

【26】〈清泰國土章〉淨6・78頁下。(答) 卷中、佛道品【正14・550上】

【27】〈極樂無苦章〉淨6・80頁下。(答) 卷上、弟子品【正14・549中】

【28】〈極樂無苦章〉イ淨6・82頁上。(答) 卷下、香積仏品【正14・542上】

〈極樂無苦章〉ロ淨6・82頁上。(答) 見阿闍仏品第【正14・555中】

【29】〈是心作仏章〉イ淨6・83頁下。(答) 卷上、佛國品【正14・538上】

〈是心作仏章〉ロ淨6・83頁下。(答) 卷上、弟子品【正14・541中】

今此の対照表によつて見ると、『群疑論』七卷中一、二、

『群疑論』と『維摩經』(金子)

四、五、六の各巻に亘つて用いられ、全く触れていないのは

三、七巻の両巻だけである。又『群疑論』の章目名によつてもほぼ推測しうるのであるが、第一巻に於ける引用は仏身居士に関わる文が中心となつてゐる。此の点については前述した拙稿においても多少ふれたのであるが、ここでは懐感が自らの浄土論を構築する為の経証として提示した経文の所在を確認したのみである。しかし、今こうして引用文を経文と併せて見ると、『維摩經』そのものが如何に広く用いられているかがわかる。又表中の(答)は懐感が経証として用いたことを示し、(問)は『維摩經』の説を基に疑問を提示したことを、そして(答釈)は提示された問題に対してそれに答え、通釈するために経文を引用したことを示すのである。このよ
うな意味で右の表を見ると明らかに疑問を提示しているのは
対照表の(5)(8)(9)(14)(17)(18)番であり、又自らの
経証として用いたのは(1)(2)(3)(16)(19)(20)(24)
(25)(27)(28)(29)番の各項と云うことになる。更に提示
された疑問を通釈するために経文を示したのが(4)(6)
(7)(10)(11)(12)(13)(15)(17)(18)(21)(22)(23)
(26)番である。

今これらの一々について細説するいとまはないが『維摩經』の説を根拠に当時の浄土教に対して疑問を提示した要点をあげて見ると凡そ次のようになる。

(5) は仏国品の「隨其心淨即仏土淨」の文、(8) は仏国品の「衆生罪故不見如来仏土嚴淨」の文、(9) は問疾品の「諸仏国土亦復皆空」の文、及び菩薩が衆生を觀するの「譬如幻師所幻人」の文、(14) 見阿闍佉品の「我觀如来、前際不来、後際不去、今不住」の文、(18) は香積仏品の「菩薩八法成就於此世界行無瘡疣生於淨土」の文、であつて、その疑問点はただ単に仏国品の「隨其心淨即仏土淨」の淨土に関する物のみでなく、今見たような仏身、往生、衆生、行法と広義に亘る疑問を提示する根拠となつていたことを知るのである。

しかし、逆にこれらの文は(1)(2)(3)の総標身土章の中で、仏身仏土の説を建てるための経証として自説の中に取り入れているのである。自らの説を支持するための経証として用いた中で特に注目されるのは(26) 仏道品の説である。此の清泰国土章では「鼓音声王陀羅尼經」に基付き、阿弥陀仏の極樂を清泰国とし、阿弥陀仏に父母ありとする。此の説は道綽、迦才等も既に取り上げていたのであるがその積に『維摩經』の文を経証として用いたのは之が始めてのようである。これらの事のみでは一概に言うことはできないが、『群疑論』における『維摩經』は淨土教に対する疑問を提示する根拠であると同時に、懐感にとつては淨土教を支持する経証として用いうる經典でもあつたと言ふことになる。

一方、『群疑論』に引用された『維摩經』の文を『維摩經』

自体の説相に準じてその引用回数を前述した対照表の番号に準じて記すと次のようになる。

- 1、佛國品 3、4、5、6、7、8、10、11、17、29
- 2、弟子品 10、25、27、29
- 3、菩薩品 19
- 4、問疾品 2、10、9、15
- 5、不思議品 20
- 6、觀衆生品 9
- 7、佛道品 2、26
- 8、香積仏品 2、18—1、18—2、22、23、28
- 9、菩薩行品 16
- 10、見阿闍佉品 12、13、14、21、28
- 11、大集經に引用される維摩經

之によつてみると最も多く引用されるのは仏国品の「11回」であり、香積仏品と見阿闍佉品の各「6回」である。それに次ぐのが弟子品と問疾品の各「4回」であり、そして仏道品は2回、不思議品、觀衆生品、菩薩行品各1回ということになる。これらの文のもつ個々の意味については兎も角、經文全体が十四品から構成されている『維摩經』中、全く触れられていないのは方便品、入不二門、法供養品、囑累品の四品のみでその他は文の多少は兎も角全て引用されているのである。これらのことから考えても当時『維摩經』が広く流布し、また説誦されていたことが推測されるのである。

まとめ

以上、『群疑論』に引用された経文を通して、唐代初期に『維摩経』がどのように読まれ、浄土教信仰とどのような部分で関わるのかを極めて概略的ではあるが垣間見ることができたように思う。本来ならばこれらの浄土教信仰と関わりを持つ『維摩経』の经文に対する諸師の説も幅広く検討すべきであったが紙幅の関係もあり割愛した。此の点については機を改めてまとめてみたいと考えている。

- 1 (イ)「釋釈浄土群疑論の引用経論文について」『印仏研究』241号、S・30・12。(ロ)、「群疑論引用経論文の検討」『仏教論叢』21号、S・32・9。
 - 2 「懐感の浄土観」『浄土宗學研究』4号、S・45・3。
 - 3 「仏解」二、117頁a～b参照。
 - 4 この表は註3の『仏書解説』を中心に、その他の書を参照してまとめたものであるが不十分なものである。大鹿実秋著『維摩経の研究』収「維摩経末註の系譜」を参照いただきたい。
 - 5 藤枝晃「維摩経變の系譜」『東方学報』36冊、288頁、196410注5、藤枝稿301～302頁参照。
- 〈キーワード〉 群疑論、維摩経、懐感

(大正大学助教授)

『群疑論』と『維摩経』(金子)

新刊紹介

福井文雅著

道教の歴史と構造

A5判・四五六頁・定価八、五〇〇〇円
五曜書房・平成十一年十一月一日